

「英語表現」から「論理・表現」へ

南出 康世

はじめに

2009年に高等学校学習指導要領は大改訂され、「ライティング」は「オーラルコミュニケーションⅠ、Ⅱ」と合体して「英語表現Ⅰ、Ⅱ」となった。言語活動に創意工夫を凝らした様々な「英語表現」教科書が登場したが、中には筆者が高校生の頃の「英文法」「英作文法」とさほど変わらない内容を主体とする教科書があり、これが採用の上位を占めていると聞く。多様性が尊重される時代である。いろいろなタイプのテキストが存在することはむしろよいことかもしれない。しかし、私たちの考えているテキストは文法記述が演繹・帰納の一方に偏したものでなく、一方が他方の短所を補完し長所を伸ばすという、いわば演繹・帰納が渾然一体化して相乗効果を生み出すような形でレッスンが展開するテキストである。この方向性を支持してくれると思われる2つの出来事があった。

1. 高等学校学習指導要領改訂(2019年告示)

この新指導要領で「英語表現」がどう変わるのか調べてみた。「…特にスピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッション、まとまりのある文章を書くことなどを扱う選択科目として「論理・表現Ⅰ」、「論理・表現Ⅱ」及び「論理・表現Ⅲ」を設定した」とある。要するにこれまでの「英語表現Ⅰ、Ⅱ」に代わる「論理・表現Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」が登場したのである。「論理」という言葉が気になったが、「論理の構成や展開を工夫して、話したり書いたりして伝える又は伝え合うことなどができる」などとある。要するに「英語を論理的に書いたり話したりする」という意味の論理であることが分かる。英語の論理構成や展開にはもちろん文法は必要である。しかしそれは従来の機械的な文法規則の定着を目的とする文法ではなく、学習者の主体性を重んじ、自己の意見や考えを論理的に書いたり話し

たりするのに役立つ文法でなければならない。*BIG DIPPER English Logic and Expression*の執筆・編集に当たってはこの点を重視し、Let's Use It, Think and Express!という設問により論理・表現と文法の一体化を図った。またリスニングを重視しInteract and Produceを設けるなど受験対策、コミュニケーションスキルの向上に万全の策を講じた。

2. 大学入学共通テスト(2021年)

「読む・聞く・話す・書く」の4技能を測る英語民間試験の導入は見送られ、リーディングとリスニングの2本立てとなった。従来のセンター試験と同じマークシート方式だが、問題内容と問題形式は大きく異なる。リーディング(配点100点)では発音やアクセント、語句整序などの問題は姿を消し、6つの大問全てが読解となった。出題内容は、友人同士の携帯メールのやり取り、ファンクラブの案内文、ウェブサイト上のホテル情報のQ&Aなど多様なテキストタイプの題材であった。リスニング(配点100点)では、すべて2回読みだったのが、大問6問のうち第3問から第6問が1回読みで難度が上がった。

おわりに

今回の共通テストでは見送られたが、「書く」「話す」のテストを何らかの形で二次個別試験では実施する大学や民間の資格・検定試験を入試に独自に導入する大学は増えるだろう。また文法の知識を問う問題は姿を消し、多様なテキストタイプの英文を読み解く問題に変貌するであろう。私たちの教科書はこれらの新しい変化に対応できると確信している。

(大阪女子大学 名誉教授)

BIG DIPPER English Logic and Expression

代表著者